

難民とその移住先の地元住民の軋轢と共生にかんする研究

ーウガンダ北西部の事例ー

平成 25 年入学

派遣先国：ウガンダ共和国

山崎暢子

キーワード：ウェストナイル地域，マディ，ルグバラ，強いられた移動，国家と社会

対象とする問題の概要

武力紛争を契機として離散した難民が本国へ帰還できずに、避難先での滞在が長期にわたる事態は、サハラ以南アフリカでもみられ[Crisp 2005]、難民の滞在が長期化することで、もともとその地域に暮らしてきた地元住民との関係が注目されるようになった。その描かれ方は大きく分けて二つあり、協調的ないし協力的であるとするか、対立し競合するというものである。難民と地元住民との各集団内、あるいは両集団間との関係に注意を払うべきであることはすでに指摘されてきたが [Hansen and Oliver-Smith 1982]、多くの研究において、難民が移住先の社会へいかに融けこむか否かが議論の中心となり、新たな社会構成員を受け入れる地元住民の側の視点は捨象されがちであった¹。

研究の目的

本研究の目的は、それぞれに多様なバックグラウンドをもつ難民と地元住民が、国家による難民政策や国際社会の支援など、「外」や「上」からの影響を受けながらも、主体的に築く社会関係の実態を明らかにすることである。この際、紛争後社会においてアクター間との関係を成り立たせている社会的文脈を分析することも重要になる。

現行の国境や行政区分と一致しない地理空間に、文化や言語、民族性を共有する人びとが暮らす状況は、アフリカでは広く見られるが、本研究の対象地域も同様である。南スーダン南西部に居住し中央スーダン系の言語集団に属するマディという民族は、ウガンダのアジュマニ県とモヨ県にも多数暮らす。また、マディと同じ言語集団に分類されるルグバラの人びとはアルア県に多く、この県でも近隣諸地域から難民を受け入れてきた。本調査はアジュマニ県とモヨ県、アルア県でおこなった²。

¹太田[2012]は、ケニアのカクマ難民キャンプを事例に、難民と地元住民の関係の多様性を指摘する。また、地元住民は難民のことをネガティブに表象することもあれば、難民が一枚岩ではないことを認識している様子が紹介されている。

² 戦闘の影響を受けて、当時の南部スーダン、モヨ地域を含む地域で生じた人の流出入の様子については Tim Allen, 1996. A Flight from Refuge. In Tim Allen ed., *In Search of Cool Ground: War, Flight and Homecoming in Northeast Africa*. London: James Currey, pp. 220-261 を参照。アルアについては、Mark Leopold. 1998. *Inside West Nile: Violence, History & Representation on an African Frontier*.

フィールドワークから得られた知見

本調査は、2014年7月3日から9月7日にかけて実施した。おもな成果は、ウガンダにおける調査許可証の取得と、難民定住地を訪問するときに要求される首相府（Office of the Prime Minister: OPM）からのレターの取得、そして、今後も継続して訪れる調査候補地を選定したことである。

首都カンパラにあるマケレレ大学中央図書館、Makerere Institute of Social Research (MISR)、Refugee Law Project などにおいて資料を収集したのち、北西部のアジュマニ県へ向かった。同県には、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）をはじめとする各機関が支援する難民定住地が現在13カ所あり、今回はこのうち8つを訪れて、各定住地の立地と周辺環境、そこに暮らす難民の民族構成と人口などを把握した。定住地がひらかれる際にはOPMと地方政府の代表が地域住民に対して説明の場を設け、彼らの同意が得られるとその土地は無償で提供されるが、その土地割譲の過程について聞き取りをした。また、本調査を通して、井戸の共用や市場での売買など日常の様々な場面で難民と地元住民が対面し、社会関係を築きつつあることを確認した。さらに各NGOで働く現地スタッフや外国人スタッフにもインタビューをして現地の近況を調べた。この際、難民支援に携わる国際機関の職員で、かつて「難民」として生活した人にも出会った。この職員たちは、支援者と、被支援者の双方の言い分を理解しうる、いわば通訳的な存在として現場で対応し、大きなトラブルに発展することなく事態を収拾していた。

その後、モヨ県とアルア県を訪問した。とくにアルア県では、南スーダン南西部からウガンダへ避難して以来、20年近く帰郷できずにいる難民にも面会した。難民が定住地を離れない／離れられない理由は様々だが[Kaiser 2012]、ここでも教育や資金、安全などがその理由として語られた。また、南スーダン北東部の乾燥地帯から初めてウガンダへやってきた難民、とりわけ高齢者や乳幼児にとって、まとまった雨の降る慣れない環境での生活には困難が伴うことを実感した。

今後の展開・反省点

本調査は、日本学生支援機構の資金による「エクスプローラ・プログラム」の助成を受け可能となった。また、調査許可証申請のために便宜をはかって頂いたマケレレ大学のエドワード・キルミラ教授をはじめ、調査に協力くださった方々に感謝したい。

本調査では、難民登録を経て、定住地をおもな生活の場とするいわゆる「条約難民」と、その支援に携わる各機関の職員への聞き取りに重点をおいた。今後は、地元のマディヤルグバラの人びとへの調査もすすめる。具体的には、交易、友人、親族関係、生活様式の共有などの聞き取りと参与観察であり³、対象とする個人と世帯の範囲を拡げることである。派遣前から辞書や語学書を通して学んでいた現地語の特有の音調を、実際に現地を訪れたことで体感できたので、さらに習得していきたい。

James Currey. に詳しい。

³ 調査項目については、佐川徹 2009. 「東アフリカ牧畜社会における横断的紐帯の維持」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカ言語文化研究』第78巻 pp.131-163 を参考にした。



写真1：アジュマニ県の定住地にて，難民登録証を手に配給へ向かう女性と，配給場所のすぐ横で凧揚げをして遊ぶ子どもたち



写真2：アジュマニ県の定住地で歌とダンスの練習がおこなわれている様子



写真3：Collecting Point のテントで，次の送迎バスを待つ難民の人たち。南スーダン各地からたどり着いた人びとは，この Elegu にある Collecting Point を経て，Nyumanzi にある Reception Centre へとバスで送られる。訪問時には，テント横にある貯水槽が破損しており給水できない状態だった。



写真4：南スーダンとの国境地点 Elegu。大型車が何台も行き交い，幹線道路は大混雑していた。



写真 5 : モヨ県パンチャラ (Panjara) 地区から望むナイル河の支流



写真 6 : Arua Hill。頂上の電波塔の足元にはラジオ局と宿泊施設があり，丘一帯に民家が建ち並んでいた。かつての Arua Hill の景観については[Leopoldo 1998]を参照。



写真 7：アルア県にあるガソリンスタンドでの朝食。近所のレストランから配達をしてくれる。蒸したジャガイモとキャッサバ、煮込んだ豆のほか、米のうえには茹でた麺類がのる。これに紅茶がついて約 60 円(2014 年 9 月時点)



写真 8：モヨ県のホームステイ先でのある日の朝食。穀物を湯で溶いた「ポリッジ」といわれる飲み物に、たっぷりの砂糖と粉ミルクを混ぜていただいた

参考文献

- Crisp, Jeff. 2005. No solutions in sight: The problem of protracted refugee situations in Africa. In (I. Ohta & Y. Gebre, eds.) *Displacement Risks in Africa*. Melbourne: Kyoto University Press. pp. 17-52.
- Hansen, A. and A. Oliver-Smith, eds. 1982. *Involuntary Migration and Resettlement: The Problems and Responses of Dislocated People*. United State: Westview Press.
- Kaiser, T. 2012. Dispersion, division and diversification: Durable solutions and Sudanese refugees in Uganda, *Journal of Eastern African Studies* 4(1): 44-60.
- 太田至 2012. 「第 39 章 難民と地元住民のあいだの多元的で錯綜した関係」松田素二・津田みわ編『ケニアを知るための 55 章』明石書店